

コラム第3回 「弱さや未熟さが、いい」



<完璧さではAIにかなわない>

未来学園の3年生は、いよいよ進路決定の時期がきました。6月からは進路のための集会や、面接・書類の書き方指導などを随時行っていきます。そんな進学や就職に関心が高まる中で、「将来なくなる仕事や、AI（人工知能）にとってかわられる仕事はなに？」「自分は何を目指したらいいの？」といった不安の声を聞くことがあります。実際にAIは人の想像も及ばないほどに発達し続けており、記憶する力や考える力でも人を上回るようになってきました。完璧に近づいている人工知能があり、一方で、何千年経っても完璧にはほど遠い人間がいます。今回のコラムは、こうした完璧にはなりきれない、人の「弱さや未熟さ」についてのお話です。

勉強や運動の分野では、競争や勝負をすることがあります。そうすると、ときに「できること」や「強いこと」が求められます。仕事においても、「法やルールに適切に則り」「ノルマや期限を遵守して」働くことが求められる現場も多くあります。ですが、このような「できること」「うまさ」「強さ」「正確さ」などは、完璧に近づこうとするとAIには太刀打ちできない時代になりました。また、心身ともに調子の波があり、老いや衰え、病気や死とつきあいながら生きている人間には、構造上の限界があります。

<弱さにみる味わい> ……この章は内容がやや難しめです。読みにくい場合は飛ばして裏面にいってください

そんな今だからこそ、弱さや未熟さを積極的に認め、人間くささに味わいを見出していくことに注目が集まっています。日常生活は、自分のできることを磨きながら、それなりに周囲の人と折り合いをつけつつ助けあうことで十分に成り立ちます。誰かより優れていたり、完璧であることは必ずしも生きる上で必要なわけではありません。多くの仕事は、人の役にたつこと（生産やサービスを代替する、利便性を上げる、困りごとを緩和・解消すること）で成り立っています。他者の不足や困難をキャッチして助け合うことが、仕事が成り立つ条件です。そこで極論するなら、人はみな弱さや未熟さがあるから、お互いに助け合う余地があり、仕事の源が生まれていると言えるのではないのでしょうか。

中国の思想家である荘子は「人はみな有用の用を知るも、無用の用を知るなきなり」との言葉を遺し、「一見なんの役にも立たないように見えるものが、実は（目には見えないけれど）大切な役割を果たしている」ことを伝えています。私は、弱さや未熟さもこうした「無用の用」であろうと考えています。また、社会学者の刈谷（2001）は、ひきこもりやニートの研究において、特定の階層の子どもが学習への意欲を失い社会からはじき出されている構造について、『自ら学び、自ら考える』個人、「主体的・自律的」に

行動する資質を備えた個人に、だれもがなれるのか』と投げかけています。人それぞれ知能や発達の度合いが違い、向き不向きや出来不出来が多様な中、みんな一律に「自立した強い個人」になるよう求めることは、むやみに落伍者^{らくごしゃ}を出すだけだということを見抜いた言葉です。

<上手に弱さを認め合う>

このように強さ弱さには個人差があります。それだけでなく同じ人の中でも、好不調の波があります。普段はなんの問題もなく過ごせている大人でも、あるきっかけでひどく弱ってしまうことがあります。今日は調子悪いとか、疲れがたまっているなどといったときがあります。また、ふとしたときにのしかかる不安感や孤独感、親しい人との離別や病気のときなど、キッチリしてられないこともあります。パニックになったり、普段なら考えられない判断の誤りや、自分でも驚くような行動を起こしてしまう場合もあります。みなさん、そのような普段どおりでいられなくなった経験があるのではないのでしょうか？

絵本作家のヨシタケシンスケさんはそのあたりの弱さや未熟さを認め、そこに含まれる味わいを切り取るのがうまいと感じます。「あしたやるよ。すごくやるよ」「その時その時に、その場にはいない人を悪者にしながら、なんとかのりきっていかうじゃないか」「今しかないのに、もったいないのに、大事にできない、やさしくできない、なぜかしら」など、人の弱さをさりげなく受け入れてくれる言葉が作中にちりばめられています。

<相手に「強さ」を求めてしまう「弱さ」>

最後になりますが、人は「自分ができることを相手（たとえばわが子）にも求めてしまう」ところがあり、逆に「自分になくて相手にある良さ」が目に入りにくくなっている場合があります。そんなとき、自分自身の過去の弱さや未熟さを思い出してもらいたいと思います。（私も含めて）人はみんな完璧じゃないからこそ、お互いのことを尊重しながら支えあっていくということは、誰しも分かっていることです。ですが、つい自分の考え方を中心に据えて相手を批判したり、相手に求めたりしてしまう自分もいたりします。1人1人がそこまで強く自立しなくても、弱さや未熟さをもった人間同士、力をあわせてなんとかやりくりしながら生きていけるものだとは私は考えています。そしてこうした感覚こそが、完璧に近づく AI 時代を気楽に生き抜く力になるのではないかと考えるのです。

野中浩一 拝